

回入院時及び61年4月の follow up CT でも異常を認めなかった左被殻部にまだら状の HDA の出現を認められた。contrast medium によって mass はやはり enhance され、血管写上も前回と同じく mass effect だけが見られた。MRI では、SE 像で内部に石灰化を思わせる low intensity area を伴う high intensity な mass として、IR 像では hematoma と考えられる high intensity area を伴う low intensity な mass として tumor が描出された。63年1月全摘出術を施行した。

脳内海绵状血管腫は文献上その10%前後が多発性であるとされているが、臨床実際に多発性が確認された報告は多くない。また今回の症例のように時期を異にして他部位に発生を見ることは極めて稀であるので報告した。

#### A-82) 傍下垂体腫瘍手術における視機能予後の検討

浅利 潤・及川 友好 (福島県立医科大学) 脳神経外科  
鈴木 恭一・佐々木達也  
山尾 展正・児玉南海雄

傍下垂体腫瘍の手術において、視機能の温存は最も重要な目的の一つであるが、稀に視機能の温存が困難な症例を経験する事がある。今回、我々は自験例において種々の要因と視機能予後との関連を検討したので報告する。対象：過去5年間に当科にて開頭手術を施行した傍下垂体腫瘍44例を対象とした。内訳は下垂体腺腫24例、鞍結節髄膜腫9例、頭蓋咽頭腫7例、鞍上部胚細胞腫3例、脊索腫1例であった。全例において、同一術者が顕微鏡下に腫瘍を摘出し、1986年以降は術中 VEP モニタリングを施行している。

結果：手術より視機能の温存あるいは改善が得られたのは40例(91%)で、視機能が術後 permanent に悪化したのは4例(9%)であった。考察：術後視力障害の原因としては腫瘍の圧迫による視神経の菲薄化、視交叉周囲への穿通枝損傷などが考えられたが、原因の明らかでない症例もあった。また、視機能予後と腫瘍の種類、大きさ、術前の視力障害の期間、患者の年齢、眼底所見などとの関連について検討し、術中 VEP モニタリングについても考察を加える。

#### A-83) 小児トルコ鞍近傍腫瘍における下垂体機能障害

会田 敏光・宮町 敬吉 (北海道大学) 脳神経外科  
阿部 弘  
藤枝 憲二・松浦 信夫 (同 小児科)

小児脳腫瘍におけるトルコ鞍近傍腫瘍の頻度は多く、腫瘍により下垂体機能に特徴的な変化があるか検索することを目的とした。対象は、当科において経験した15才以下のトルコ鞍近傍腫瘍24例、内訳は、頭蓋咽頭腫7例、鞍上部胚芽腫14例、奇形腫2例、下垂体腺腫1例、ラトケ嚢胞1例である。治療としては、頭蓋咽頭腫は、手術あるいは手術+照射、鞍上部胚芽腫は1例を除き、照射単独治療をおこない、他の腫瘍においては、手術、手術+照射をおこなった。頭蓋咽頭腫は、初発症状は頭痛視力障害が多く、多飲・多尿は1例のみであった。鞍上部 germ cell tumor (胚芽腫、奇形腫)は全例多飲・多尿を初発症状としていた。下垂体機能検査は、治療前に、一部の症例では治療後におこなった。GH は全例に障害が認められ、LH、FSH、ACTH の順に障害の頻度が多く、TSH は、TRH 負荷により、低反応と反応遅延をみとめた。鞍上部 germ cell tumor における下垂体機能障害および尿崩症の頻度は頭蓋咽頭腫に比較して高く、両者とも治療後に改善は認められず、長期の補充療法を要した。

#### A-84) Dynamic CT による下垂体 microadenoma の局在診断

黒木 瑞雄・田中 隆一 (新潟大学脳研究所) 脳神経外科  
横山 元晴・田村 哲郎  
土屋 俊明・伊藤 寿介 (新潟大学歯学部) 歯科放射線科

下垂体 microadenoma の局在診断における dynamic CT の有用性について検討した。<対象> 1984年から1987年までの間に dynamic CT (Dy-CT) を行い、手術所見の得られた microadenoma 21例を対象とした。内訳は ACTH 産生腺腫8例、PRL 産生腺腫8例、GH 産生腺腫5例、Hardy 分類では0型11例、I型9例、III型1例である。<方法> Anthropological basal plane に垂直方法の coronal scan で肘静脈より造影剤 50ml を用手的に数秒で注入し、注入と同時に Dy-CT を開始した。また Dy-CT 終了後しばらくしてから造影剤 50ml を bolus 注入し、50ml を点滴しながら通常の造影 CT (CE-CT) を行い Dy-CT と比較検討した。<結果> CE-CT では21例中11例(52.3%)で腺腫自体が正常下垂体と isodensity を呈したため、腺腫の局在診断は困難であった。一方 Dy-CT では21例全例で腺腫は正常下垂体に対し相対的 low density を呈したため局在診断が可能であり、また手術所見とも一致した。

<結論> Dy-CT は microadenoma の局在診断に極めて有用な方法である。